

年が明け、読む会は3年目を迎えました。今年の祝日が第3月曜日となるのは9月だけで、例会は去年より多い11回の開催となります。オリンピック選手に負けず、全員元気に完走したいものです。今回の第14巻は、足利、新田両氏の対立が全面衝突に発展し、成立したばかりの建武政権が崩壊する場面です。天皇との敵対に踏み切らざるを得なかった足利尊氏の苦悩にも触れながら読み進みました。

◇この日の輪読箇所は次の通りです。

(一) 足利殿と新田殿と確執の事 (二) 両家奏状の事

足利・新田の支配権争い (p345～348)

中先代の乱を平定した足利尊氏は、後醍醐天皇が認められた東国八ヶ国管領権を使って、関東の新田氏所領を部下に恩賞として分け与えた。これに対抗して、新田義貞は諸国の足利領を取り上げて分配する。この確執は、鎌倉幕府打倒直後に始まるが、いまや一触即発の様相となった。両氏はそれぞれ相手の討伐を朝廷に申請する。

(三) 節刀使下向の事

尊氏討伐軍出陣 (p356～360)

朝廷は、確実な証拠がないとして、結論をいったん保留したが、護良親王付きの女房が上洛して親王の殺害を報告、足利方が諸国に発した新田誅伐の軍勢催促状が提出されたことで、足利氏を朝敵と決定。新田義貞を大将とする討伐軍が、尊氏が居座る鎌倉に向かった。

(五) 矢作合戦の事

足利氏、尊氏抜きで迎撃 (P362～366)

討伐軍の出発を知った尊氏は「後醍醐天皇からいただいた厚恩には背けない。護良親王殺害も軍勢催促も私の知らぬこと。諸君で対処せよ」と、動こうとしない。困った一族の重鎮たちは「このままでは、天下の武士は公家の下で苦しむだけだ」と尊氏抜きの迎撃に踏み切り、尊氏の弟直義の指揮下に三河国矢作宿まで出陣した。

(六) 鷺坂軍の事 (七) 手越軍の事

退却重ねる足利方 (p370～373)

矢作で敗れた足利方はその後も連敗して鎌倉に退却。新田方はなぜか、伊豆で追撃の足を止め、不運を招く。

(八) 箱根軍の事

尊氏ついに立つ (p374～377)

鎌倉に戻った直義らは、法体姿で建長寺に籠る尊氏に「たとえ出家しても処罰する」という偽諭旨を見せて翻意を迫り、説得に成功。直義は箱根路で、尊氏は足柄峠から竹下に出て新田軍に対戦することになった。(梅松論によれば、尊氏が籠ったのは浄光明寺)

(九) 竹下軍の事 (十) 官軍箱根を引き退く事

新田軍、尊氏に敗れ総退却 (p382～393)

竹下で尊氏軍に対した新田方は、公家と武家の混合部隊だった上、大友、塩冶氏の寝返りもあって、たちまち総崩れ。優勢だった箱根路の義貞は、退却を決意する。その後も先陣を立て直せないまま、尾張まで後退した。

(十一) 諸国朝敵蜂起の事 (十二) 將軍御進発の事

京都攻防戦へ (p396～407)

このころ、足利一族の細川定禅が讃岐で蜂起、備前に渡海して京都に攻め上る気配を見せた。このほか五畿、七道の各地で、建武政権に反旗を掲げる動きが続発。朝廷は尾張の義貞に帰還を命じ、迫る足利軍から宇治、山崎、大渡のラインで京都を防衛する布陣を敷いた。

(十四) 山崎破る事 (十五) 大渡破る事

(十六) 都落ちの事

防衛線破れ、天皇家都脱出 (p410～415)

細川・赤松軍に山崎を破られた事で官軍は総崩れ。天皇は、三種の神器とともに比叡山下日吉神社内西大宮付属の仏教施設「彼岸所」に移った。延暦寺の支配下にあった当時の日吉神社の神仏習合の姿を物語る。

第16巻輪読予定ページ (3月16日)

- 1) 34所々の城郭～39向けられける
- 2) 45さる程に～48取られける
- 3) 49さる程に～52上げられける
- 4) 53さる程に～57着き給ひける
- 5) 61さる程に～64濡らされける
- 6) 65かくて～69陣を張る
- 7) 77楠判官正成～81中に臥しにけり
- 8) 82かかりければ～85引かれけれ
- 9) 87これより前に～90先とする
- 10) 94持明院殿～97合はせける
101これのみ～102構へらる
- 11) 103かかりしかば
～106恐ろしけれ